

読書のすゝめ

その21

H 27

11 / 10



修学旅行の前に

ある日、戦争がやって来た…。70年前に沖縄では何があったのか。そして、現在の沖縄はどうなっているのか。これからの沖縄はどうなるのか。戦後70年。私たちが決して忘れてはいけないことは？ 修学旅行に行く前に、しっかり「沖縄」を学んでいってください。

『沖縄戦 ある母の記録』安里要江（高文研）

県民の四人に一人が死んだ沖縄戦。その最大の犠牲者は住民だった。「鉄の暴風」の下、人々はいかなる日々を生き、かつ死んでいったか。戦場で親を、洞窟の中で赤ん坊を、さらに収容所の中で夫と長男を失った若い母親の克明な体験記録。著者安里さんには2011年の修学旅行でお話をうかがいました。その時の映像（DVD）は図書館にあります。「平和の語り部」もみなさん御高齢となり、直接お話しを伺うこともままならなくなりました。

『13歳の少女が見た沖縄戦』安田未知子（WAVE出版）

「無知」という病気が、戦争を連れてくる。1944年、教師を目指していた13歳の安田未知子さんは沖縄県立第一高等女学校に入学した。輝く未来を胸に抱き生きる日々は、沖縄戦によって一変する。牛島中将の伝令役として、戦争に参加。度重なる空爆、目の前で次々と人が死んでいく光景、草木を食へ飢えをしのぐ毎日。戦後70年の今だからこそ伝えたい、83歳の「沖縄のマザーテレサ」が語る、凄惨極まる沖縄戦の真実。

著者は東京都港区生まれ。両親とともに8歳で沖縄に渡る。悲惨な戦場を生き残り、戦後、沖縄初の女性英語教官となる。自身の子を5人育てながらも、貧しく教育やしつけが行き届かない生徒を家に住ませ、43人を巣立たせた。現在は、弟（医師）と医療法人和泉会いずみ病院を運営、介護老人保健施設いずみ苑の苑長を務めている。

『戦場ぬ止み』三上智恵（大月書店）

沖縄に「戦後」はいつ訪れるのか。平和への願いと豊かな海を押し潰し、基地建設が強行される最前線で日々綴られた怒りと哀しみ、そして人々の誇り。「標的の村」を上まわる衝撃のドキュメンタリー撮影記。今年7月映画化されています。

『今年しむ月や 戦場ぬ止み 沖縄ぬ思い 世界に話ら』

今年の11月（平成24年県知事選挙）にこそ 戦場にとどめを刺して 終わらせよう 沖縄の思いを 広く世界に知らせましょう。このことが何を意味するか……。ぜひ本書で確認してください。

※今月は図書館内に沖縄コーナーを作りまして
担当は1年4組の図書委員さんです。
2年生のみなさん、ぜひ活用してください！

